ベルグソン「アリストテレスの場所論」（承前）

五十嵐達六郎 譯

第六章

アリストテレスは辨證法的定義によつて場所をいかに規定したであらうか。

我々は四つの定義を擧げこれらによつて場所を規定し得ると考へたのであるが、その中三つの定義が論議されそして排けられた。(一) 場所は質料でもなく、形相でもなく、また、物體を除去した時殘存すると思はれた空虛な擴がりでもない。殘るところは、例へば物體が空氣中で廻轉するとすればその場合の空氣の樣に、物體の場所とは、それによつて物體が包まれるものであるといふ定義である。(二) しかし場所は空氣の全體を意味するのかそれとも空氣の部分を意味するのであらうか。ところで物體は空氣中に位置を占めると我々がいふ場合、空氣全體を指すのではなく、物體に觸れ・それを包む・最内端の部分（pars extrema）を指すのである。もしさうでなければ、場所と物體との大きさは等しくないであらう。(三) しかし我々が通常場所と稱するものをアリストテレスは第一の（すなはち最内奥の）場所（locus primus (id est proximus)）と名付けてゐるが、その場所はそれに包まれてゐる物體よりも大きくも小さくもないと言ひ得るのである。(四) このことから、場所とは包むものの内表面（interior continentis rei superficies）であるといふことになる。

(一) ここにアリストテレスは極めて晦澁な見解を挿入した（210 a 24—210 b 2）、この見解は當面の問題には餘り密接な聯關を持たないと思はれるにしても、これを説明してみやう。或るものが他のものの内に存在し得る仕方に八つあり、

すなはち、部分が全體の内に存在し、全體が部分の内に存在し、種が類の内に存在し、或ひは類が種の内に存在し（蓋し「種の部分が種の定義の内に在る」のと同樣類は種の定義の内に包まれてゐるからである）、形相が質料の内に存在し、結果として現はれるべきものが動力因の内に存在し（「ギリシアに鬪することがらが王の内に在る樣に」）、運動が目的の内に存在し、最後にはものが瓶または場所の内に包まれてゐる、これらがその例である。――或る人は問ふであらう。一體何等かのものが自己自身の内に存在し（in semetipsa esse）得ないのであらうか、と。――この問は、自己自身によつて（per se）自己自身の内に存在することを意味するか、或ひは他者によつて（per aliud）自己自身の内に存在することを意味するか、この二義を有するが、アリストテレスは、ものが自己自身の内に存在し得るのは（それの部分によつて、すなはち）他者によつてであつて、決して自己自身によつてではないことを、證明するであらう。「包むものと包まれるもの とが全體の部分をなすのであるから、全體は自己自身の内に存在するといはれる。實際、もの全體の名稱が部分の考察から導出される、例へば表面の白いものは白いと呼ばれ思惟能力の鍛錬されてゐるものは智慧あるものと呼ばれる。それ故瓶も酒も自己自身の内に存在するものではないであらうが、酒の瓶（ヴィニウム）といふ統體をなすもの」は自己自身の内に存在するであらう。蓋し包まれるものも包むものも兩者とも同じ〔統體をなす〕ものの部分である、すなはち、白さまたは智が人間の内に存在するのと同樣に、瓶は酒の瓶〔といふ統體をなすもの〕の内に存在するであらう。」〔二一〇 a 二七以下〕（ɔ10, a, 33―34 の二行は次の樣に書かるべきだと思ふ、οὕτω μὲν οὖν ἐνδέχεται) οἷον τὸ λευκὸν ἐν σώματι. 蓋し πρώτως δ' οὐκ ἐνδέχεται といふことばを括弧の中に入れなければ、この見解は他の箇所と全く矛盾するからである。）從つてアリストテレスは、我々が酒の瓶と名付ける統體をなすものは瓶と酒とから成立つから酒は瓶の内に包まれると記してゐるのである。從つて、酒の瓶は、それが酒であるといふ點では瓶の内に包まれるが、それが瓶であるといふ點では酒を包むのである。このことから、酒の瓶は或る意味で自己自身を包むことになるであらう。それ故、酒の瓶はそれの部分すなはち酒と瓶とによつて自己自身の内に存在するのであつて、自己自身によつて（第一義的に）自己自身の内に存在するのではない。この同じことは人間が白いとか智慧があるといふ場合にもあてはまる。蓋し、例へば白さは人間の内に存するのではなくして人間の身體の内に存するのであり、しかも身體全體の内に存するのではなくして身體の表面に存するからである（しかしそれは、部分が全體の内に包まれるのと同樣な仕方で、身體の表面に存するではない、なんとなれ

ば表面と白さといふ二つのものは意味も性質も互に異つてゐるからである)。從つて瓶と酒とが分離したまゝである限り、瓶または酒が部分であるといふ理由は毫も存しないであらう。酒の瓶が存する場合、それらは部分となるのであらう。すなはち白さが人間の内に存するのと同樣に、酒の瓶は自己自身の内に存在するのである。――ところで、歸納的に到達される事柄(すなはち、包むことに八種類あることを假に認めるにしても、ものは決して自己自身の内に存在し得ないことを見出す)は理によつても肯定されるのである。すなはち、酒の瓶が(それの部分によつてではなく)自己自身によつて自己自身の内に存在するとすれば、瓶は瓶でも酒であり、酒は酒でも瓶でもあることになるであらう。しかし事實はこれと相違し、酒瓶は、自己自身が酒ではなく、酒が酒なる限り、酒を受容れるのであり、また酒はそれ自身が酒瓶ではなく酒瓶が酒瓶なる限り、酒瓶の内に包まれるのである。かくて定義そのものを考察するならば、包むものと包まれるものとは意味を異にするのを見出すであらう。しかし定義を無視して隨伴することがらまたは偶有性を注意しても、同じことになるであらう。すなはち酒瓶が自己自身の内に存在するとすれば、それは自己自身のみならずまた酒をも包むが故に、二つのものの一が他の内に存在する(「二つのものが同時に同處に存在する」)ことになるであらう、これは何にもまして理に反すると思はれる。

これら種々の論議からして、いかなるものも自己自身によつて自己自身の内に存在し得ないことが歸結される。――ヅェノンは、一體場所は場所を占めるかと問ふてゐるが、これに對してアリストテレスは「第一の場所は、他のものの内に存在するが、しかし場所としての他のものの内に存在するのではなく、狀態(habitus)または屬性(affectus)として他のものの中に存在するのである」と考へ得ると答へてゐる。

しかしいま、アリストテレスがこの樣な理窟を並べ立てることによつて何を目指してゐるのかを知らうとする人には大體次の樣に説明さるべきであらうと思ふ。

すべて存在するものは何處かに存在し從つて一定の場所を占めるといはれるが故に、アリストテレスは、我々が場所そのものにも場所を賦與すべきであると考へその結果同じ問題が無際限に起るであらうことを、恐れてゐるのである。從つて特に第一の場所(包むものの内表面)と共通の場所すなはち天體全體との二つの場所を樹てるに先立つて孰れも場所を缺き得ることを强調してゐるのである。すなはち第一の場所は何等かのものの内に存在してゐるが、その在り方は場所を持つものが場所の内に存在するのとは異つて限定が限定されたものの内に存在するのと同樣なのである(「卽ち第一の場所が他のものの内に存在することを何物も妨げない、尤も場所としてのそのものの内に存するのでは

なく、健康が温いものの内に狀態(ἕξις)として存在し温さは物體の内に屬性(πάθος)として存在するのと同樣の在り方をなす」[二一〇b二四]。しかし共通の場所はいかなる場所の内にも存在しないのみならず、いかなるものの内に存在するのでもない、蓋し後の箇所で見る樣に、それは自己の部分によつて自己自身の内に包まれてゐるのである。

(二) Phys. IV, 212, a, 2「かくて場所は上述の三つの孰れでもないとすれば、すなはち形相でもなく質料でもなくまた移動する事物の擴がりから獨立な・常住に存在する・擴がりでもないとすれば、場所は必然に上述の四つの中殘つたものすなはち包む物體の境界(τὸ πέρας τοῦ περιέχοντος σώματος)でなければならぬ。」

(三) Phys. IV, 211, a, 24 {a 23 の誤}「物體は空氣の内に存在しまた空氣は天體の内に存在するが故に、物體は場所としての天體内に存在するといふ、そしてそれは空氣の内に存在するといつても、空氣のすべての部分の内に存在するのではなく、空氣の内端の部分(τὸ ἔσχατον)がそれを包むが故に、空氣の内に存在するといふのである……。」

(四) Phys. IV, 211, a, 27.「蓋しすべての空氣がものの場所であるとすれば、各のものの場所と各のものの大きさは等しくないであらう。しかし場所とものとの大きさは等しいと考へられて居り、かゝるものは、その内にものが存在する第一の場所(τὸ πρῶτον οὗ ἔστιν)なのである。」

いかなる段階を經てアリストテレスがこの定義に到達したかは明かであらう。すなはち、第一に質料形相擴がりの樣に包まれた物體に存するもので場所の本性に無緣なものをすべて排除した。次に包むものに存するもので包まれた物體の特有の場所と聯關を持たないと思はれる一切のものを排除した。すなはち、排除の第一の系列により、包まれた物體の外的形相または境界へと導かれ、第二の系列により、包むものの内表面へと導かれたのである。しかしながら物體の境界は物體と共に運動するが場所は場所を變じ得ないが故に、最後には包まれた物體の境界をも排除した、その結果ものの境界—そこに於て包まれた物體が接觸される—の外にはもはや何物も殘らないであらう。從つて、いはば排除の二つの系列を中間に向つて追求し中間に到達し、かくて場所とは包むものの内側の境界であり表面である(interior rei continentis terminus atque superficies)と定義したのである。

場所のこの第一の定義によつて、障碍となつてゐた多くのものが取除かれる。なんとなれば、場所をかく定義

するならば、必然に、第一の場所はそこに位置するものを包むがそれはそのものの部分でない—狀態でもなく、擴がりでもなく、或ひは他の何等かのものでもない—ことにならねばならぬであらう。また場所は包まれたものから分離され得るし、包まれた物體よりも大きくも小さくもないことになるであらう。(一)

(一) Phys. IV, 210, b, 35 (b 34 の誤) 「我々の考によれば場所とは第一にもの—場所がそれの場所である—を包むものであり、次に場所は事物の部分ではなく、更に第一の場所はものより大でも小でもなく、更に場所は各のものを離れて獨立に存在するものである。」

我々が包むものと呼ぶものは一體何であるかと、恐らく問はれるであらう。これは問ふに價する、少くとも自己の部分を包まぬものは決して見出されないからである。かくて、もしこの見地のみから判斷すれば、すべての物體はそれの部分—物體はその部分を包まれたものとして保つ—の場所であると信ずるであらう。しかしアリストテレスは、場所がその内に位置するものを包むことと全體が部分を包むこととは異つてゐると考へた。もし包むものと包まれるものとが連續的であれば全體は部分を包み、もし包むものと包まれるものとが接觸的であれば場所はその内に位置するものを包むのである。(二) しかし接觸的と呼ばれるものは何であるか連續的と呼ばれるものは何であるか、これを定義しなければならぬ。この區別についてアリストテレスは特に三箇所で論じたが、その中の二箇所は自然學講義に、第三の箇所は形而上學に見出される。(三)「ものの端 (extrema) とものの端とが共存せる時それらのものは接觸するといひ、それらの端が同一なる時それらのものは連續するといふ。」換言すれば接觸せるものとは、それらのものの相互に觸れ合つてゐる端が分離してゐるか或ひは少くとも思惟によつて分離され得るものをいひ、これに對して連續せるものとはそれらのものの端が存在し始めたり存在し終つたりすることなく互に融合し同一物と思はれるものをいふ。

(一) Phys. IV, 212, a 32—そこで、包むものが分離せずして連續してゐる時には、ものは包むものの内に存するといはれるが、しかしそれは場所の内に存することを意味せずして部分が全體の内に存することを意味する。しかしながら包

むものが分離し接觸してゐる時には、ものは包むものの最内奥の端の内に存在し、しかもその端は包まれたものの部分でもなくまたそれの擴がりより大きくもなくそれと大きさを等しくするものなのである。」

(二) Phys. VI, 231, a, 22「連續せるものとはそれらのものの端が同一なるものをいひ、接觸せるものとは端が同處にあるものをいふ。」——Metaphys. N (現實例では XI), 1068, b, 27; 1069, a, 6「ものの端が同處にあればそれらのものは接觸してゐるのである……各のものの限界 それによりものが接觸し結合する—が同一となる時、それらのものは連續的であるといふ。」——Phys. V, 227, a, 11 (a 10 の誤)「各のものの接觸する限界が同一となり、そしてその名が示す樣に互に結合される (συνέχεται) 時、それらのものは連續的 (συνεχές) であるといふ。このことは端が二であれば不可能である……。もし連續的であれば必然に接觸しなければならぬが、接觸するものは必ずしも連續的ではない。」

しかしながら、もし假に或る與へられた物體の部分は相互に連續的であり物體はそれを包む物體と接觸的でなければならぬとすれば、物體には場所を許容するが部分には場所を拒否することにならないであらうか。アリストテレスの答によれば、ものが場所を有する仕方に現勢的 (actu) と潜勢的 (potentia) との二樣あり得る。物體そのものはそれを包むものに接觸してゐるから現勢的に場所を有する。また、例へば堆積された穀物の粒は他の粒に接觸ししかも分離したまゝ存在してゐる樣に、部分が全體の内に包まれつつ他の部分と連續せずして接觸して居るなら、その部分も場所を現勢的に有してゐるのである。しかし本來の意味で場所と呼ばれるもの、すなはち相互に接觸せずして連續するもの、は場所を現勢的に有せず潜勢的に有してゐるのである。(一) もし物體が破碎されて包まれた部分が解放されるならば、各の部分は直ちに場所を有するであらう。從つて部分は場所を占める素地を持つてゐたのであり場所を潜勢的に有してゐたのである。しかし物體の内に包まれた部分が連續し相互に結びついてゐる限り、それらの部分は全體に於る部分として物體の内に存するのであつて、場所の内に位置するものとして物體の内に存するのではない、すなはち部分は、それが解放された時、自己のものとして請求する・いはば場所を占める・力を物體全體に暫時委託してゐるのである。(二)

（一）Phys. IV, 212, b, 3「或るものは場所の内に潜勢的に存在し、或るものは場所の内に現勢的に存在する。それ故同種の部分から成る實體（αὐ（τοσυμφές）が連續的である時には、部分は場所の内に潜勢的に存在するのであるが、これに對し堆積せるものの様に部分が分離し接觸してゐる時には部分は場所の内に現勢的に存在するのである。」

（二）空虛と場所とに聯關せる次の見解は、ベッケルその他の人人が誤記したため――と私には思はれるが――極めて理解し難くなつて終つたが、いまや恐らくはこれを理解し得るであらう。その見解とは「いかにして物體は場所または空虛の内に存在するであらうか。このことは、全體が分離せる場所と持續する物體との内に（ἐν κεχωρισμένῳ τόπῳ καὶ ὑπομένοντι σώματι）置かれる時には、生じない。」（Phys. IV, 214, b, 24）といふのである。もし σώματι を σῶμά τι と書換へるなら、直ちに明瞭となるであらう。（ベルグソンのこの校訂及びロス版等の同じき校訂に從へばこの一文の最後の一句は「或る物體の全體が分離存續する場所の内に置かれる時には……」 ὅταν ὅλον τεθῇ ἐν κεχωρισμένῳ τόπῳ καὶ ὑπομένοντι σῶμά τι. となる）すなはち空間または空虛が或る分離せるものとして存在し得ないことが問題とされてゐるのである。從つてアリストテレスは、獨立に存在する場所の内や空虛の内にはいかなるものも存在し得ないと論ずるであらう。蓋しもし擴がりがそれ自身分離せるものとして存在するとすれば、それはそこに位置する物體の基底に存在し、この物體のすべての部分をいはば貫徹してゐるであらう。從つて物體の部分は、物體全體が場所を所有するのと同様、場所を所有するであらう。しかしながら、物體が部分の内に包まれてゐる限り（ἐν μὴ χωρὶς τεθῆται）部分は場所を潜勢的に有するに過ぎず眞に場所の内に存在するのではなくして、全體の内に存在するのである。從つて場所は部分全體を貫徹し得ない。このことから、場所が擴がりでないことが結論されるのである。

しかしながら、連續と接觸とを、部分と全體とを、經驗的に區別するのは、一體いかなる理由によるのであるかが、いまや問題となる。なんとなれば接觸と連續とを辨證法的定義により規定することは取るに足らぬことであり、その上、連續せるものは相互に結びついてゐるが接觸せるものは相互に觸れ合ふに過ぎないことを、いかなる徵表によつて見出すのであるかが問はれねばならぬからである。立入つて考察するに、もし世界は、その内の一切のものが靜止してゐるといふ在り方のものだとすれば、接觸と連續とを區別し得る何等の徵表も見出されないであらう。しかし、或るものは運動し或るものは靜

46

止してゐる、そして運續せるものとは、一方が運動すれば他方が必ず運動するものをいひ、接觸せるものとは、一方が靜止してゐても他方は運動し得更に兩者とも動かされてもそれぞれが自由にそれぞれの方向へ運動するといふ樣な聯關を相互に持つものをいふのである。いまやアリストテレスが「もし場所運動が存在しなかつたならば、場所について探求されなかつたであらう」[1]といつたことの意味が明かとなつた。またアリストテレスが場所についての論證全體の第一の部分を、「場所は包むものの境界でなければならぬ。包まれるものといふのは運動するものである」といふ言葉に要約した理由を見出し得たのである。

(一) Phys. IV, 212, a 12「かくて第一に、もし場所運動が存在しなかつたならば、場所は探求されなかつたであらうといふことを理解しなければならぬ。」—— Cf. Metaph. Λ (現慣例では XII), 7 (K. 11. 1067 b 35)「すべて運動するものは場所の内に存在する。」

(二) Phys. IV, 212, a 6 (a 5 の誤)「必然に場所は……包む物體の境界でなければならぬ。包まれる物體とは移動により運動し得るものをいふ。」

大體右と同樣な仕方で、次に述べるアリストテレスの47晦澁な論證を解明しやう、粗笨な言葉になる恐れはあるがとりあへず(ラテン語に)直譯しやう。「水が瓶から流出る場合の如く、包むものが變化しないのに、包まれ分離せるものは屢々變化するが故に、兩端の間の擴がりは、恰も場所を變ずる物體から獨立の存在者なるかの如く、或るものであると思はれる。しかしこの樣な擴がりは存在せず、場所を變じ・接觸し得・る物體の中任意の物體が偶々入來るのである。もし擴がりが元來獨立に存在し變化しないものであるとすれば、無限に場所が存在することになるであらう。なんとなれば、水や空氣が場所を變ずる時、全體の内のすべての部分は、瓶中のすべての水がなしたと同じことをなすであらうからである。これと同時に場所も亦場所を變ずるであらう。その結果場所の場所たる他の場所が存在するであらうし、また多くの場所が同時に存在するであらう。しかしながら、瓶全體が場所を變ずる時、部分の場所、すなはち部分がそこに

於て運動する場所、は變ぜずして、同一である。なんとなれば空氣や水や或ひは水の部分の一が他に繼起するのは、それが現に存在する場所に於てであつて、それらが生じた場所・すなはち全宇宙の場所の部分たる場所・に於てではないからである。」アリストテレスの見解を次の樣に解釋しやう。もし瓶の内に水や空氣が包まれ相互に交替することを考察するならば、瓶そのものが兩者の場所であり、或ひはむしろ運動する瓶を取圍む不動のものはすべて場所であるといはれるであらう。もし同じ瓶が移動するならば、空氣の部分や水の部分は以前には場所を有しなかつたが故に、場所を變じないであらう。すなはち、それは、場所の内に位置するものの樣に運動する瓶の内に包まれ運動したのではなく、全體の内の部分の樣に運動する瓶の内に包まれ運動したのである。しかし場所を有しないものは場所を變ずるを得ない。從つて瓶が場所を變ずるにしても、部分は同じものの内に於て(部分は場所を有しないから、その同じものといふのは場所ではなくして全體である)存在し運動するのである。しかしながら瓶の胴の間の擴がりが獨立な或るものであると信ずるならば、必然に水の任意の二部分の間に擴がる擴がりについても同樣に考へねばならぬであらう、それは擴がり全體の部分だからである。從つて水全體がそれを包む瓶に對して有してゐたのと同じ關係を、各の部分はそれを取圍む部分に對して有するであらう、すなはち瓶が空氣中で場所を變じ得るのと同樣に、水の部分は瓶の内で場所を變じ得るであらう。かく考へて置いて、瓶が何處かへ移動したと假定せよ、しからば内部で運動した水の部分は同時に二つの場所を占めることになるであらう、すなはち、第一にはそれが瓶内部で移動した際目指した場所を、第二には瓶が空氣中で或ひは更に進んで全世界に於て有する場所を占めることになるであらう。しかし二つの場所の一が他の中に存するといふこと、或ひはアリストテレスがいふ樣に場所の場所、は全く理に反する。このことからして、擴がりが獨立の或るものであると考へる人々も、運動するものは運動する物體の内を、それが不動の物體の内を運動するのと同樣の仕方

48

で運動すると思つてゐる人々も、同じ誤謬を犯してゐることが結論される。從つて我々の定義は訂正されねばならぬ、或ひはむしろ完成されねばならぬ。場所は他のものの運動を自らの中に包んでゐるがそれ自身は運動しないものであると思ふ。

(一) Phys. IV, 212, b, 14.

アリストテレスは要約していふ、「瓶は移動し得る場所であるのと同樣に、場所は不動の瓶である。……場所は不動であらうとする。(一)」從つて運動するものを包むものがまた幾度運動するにしても、包まれたものの運動は瓶内の運動と同樣であつて場所内の運動とは異つてゐると、我々は思ふ。「川の中の舟の樣に、動かされるものの内にあるものが動かされて場所を變じる時には、包むものは場所よりもむしろ瓶の役割を演じる。場所は不動であらうとする。それ故、川全體が不動なのであるから、むしろ川全體が場所なのである。(二)」この見解を大體次の樣な仕方で解釋しやう。流れに從つて川を下る舟を、また舟の中で徘徊してゐる人間を、想像せよ。その人間の場所は運動する舟でもなく、まして舟を圍む・水の・運動する内境界でもなく、川全體であると思ふ、なんとなれば川全體は永劫の昔より不動の境界内に保たれてゐるからである。從つて人間と舟とは、水と空氣が瓶中に在る如く、川の動く流れの内に存在するといふのである。しかし流れも舟も人間も、場所としての川全體の内に存在するのであつて、流れと舟と人間の三者は統體をなしてゐる、尤もそれの部分は相互に連續的ではなく場所を潛勢的に有するに過ぎないが、全體は場所を現勢的に有するのである。――ここに至つて始めて、アリストテレスの「場所とは包むものの・不動の・第一の〔最内奥の〕境界(continentis terminus immobilis primus)である(三)」といふ見解を理解し得るのである。もし運動するものが運動するものの内で運動し、これが第三の運動するものの内に包まれてゐるとすれば、運動するものの・運動する・境界を得るであらう、更にこれらのものを經て歩を進めるならば、我々の進路に於て、第一の〔最内奥の〕不動の境界が存在するのを見出すであらう、これが眞に場所なの

である。

(一) Phys. IV, 212, a, 14——Phys. V, 224, b, 5.「蓋し形相や場所や量は動かしもしないし動かされもしない、しかし動かすものと動かされるものと運動の目的とは存在する……運動の目的、すなはち形相、性質、場所は不動である。」——Cf. Metaph, X〔現慣例では XI〕 1067, b, 9.

(二) Phys. IV, 212, a, 16.

(三) Phys. IV, 212, a, 20「從つて、包むものの・不動の・第一の〔最内奥の〕境界、(τὸ τοῦ περιέχοντος πέρας ἀκίνητον πρῶτον) これが場所なのである。」

殘る問題は、何が勝義に於て第一〔最内奥〕の不動の境界であるかを問ふことである。すべて運動するものは、他から力を加へられることによつてか或ひは本性に從つてか運動する、すなはち、本性に從つて運動するものとは、重さにより下方へ、輕さにより上方へ、移動するものをいひ、他から押されて動き出すものは本性に反して運動するといふ。かくて土の類は土の領域へ水の類は水の領域へそれの下降運動力(nutus)と重さ(pondus)によつて移動し、空氣の類や火の類は高さを求める本性によつて上昇するのである。(一)——これと同じ考をアリストテレスは、自然學講義その他の書物で種々樣々に表明した、(二)すなはち重さの特有の作用は下方へ向ふこと、輕さのそれは上方へ移動することだといふのである。この區別が彼自身の他の教説にいかなる力を及ぼしてゐるかは天體論第四卷から讀みとられるであらう。この箇所でアリストテレスは次のことを誇つてゐる樣に思はれる、すなはち多くの先行哲學者達は一のものが他のものより重いか輕いかするのはいかにしてであるかを説明したに過ぎなかつたのに對し、始めてアリストテレスは重さと輕さとの原因を明かにしまた或るものが下方へ向ひ或るものが上方へ運動するのは何故であるかを説明したのである。(三)上述のことはいかなる原因によるのであるかについても、その卷で詳細に説明されてゐるのを見出す。(四)そこではアリストテレスは、運動の三種類——、その第一のものは大きさに關聯し、第二のものは形相または性質に關聯し、最後に第三のもののは場所に關聯する——を樹ててゐる。しかし成長と成長の原因との間、變化と變化の原因との間には、偶然的でない結合、すなはち成長變化する

ものの本性そのものに由來する結合、が存するのと同樣に、場所に於てもまた動くものと動かされるものとが結合するのは一般に偶然によるのでなく本性そのもの及び恒常な根據によることを見出す。その結果、各の物體は內的欲動によつてそれの特有の場所へ、いはば形相の完成へ、(ル)と運動することになる。この理由によつてアリストテレスは、ピュタゴラス學徒—彼等は火のすぐれた權威を考究した時、火が世界の中央に位置しなければならぬと考へた、恰も生に於てすぐれたものは必然に中央の場所に存しなければならぬかの如く—を非難してゐる。(ヌ)しかしながら事實は甚しく相違し場所は作用力を有せず單に完成力を有するに過ぎないのである。(ヒ)例へば空氣に變じた水は直ちに空氣の領域へ上昇するのを或ひはそれを目指すのを見出すであらう、しかしこれは、空氣の自然的場所が作用力として働き空氣がひきつけられるからではなく、水が變じて受容した空氣の形相の中には、或る新しい場所への渴望が包まれ、從つて空氣になつたものはそれが自然的領域から離れてゐる間は自己の本性を全然持たぬからである。しかしながら要素は中心から外端に至るまで相互に連續し、それ故水は土を、空氣は水を、火は空氣を、最後にエーテル體は火を取圍むからして、天球全體は圈に分たれ、その各の圈は自然的場所として自然的要素に賦與されねばならぬ。その結果、それらの圈が眞實の意味に於て第一〔最內奧〕の不動の境界なのであつて、これにより自然的秩序に配列された自然的要素が限界されるのである。すなはち他の任意の境界にはいはば不安定な靜止が存在するが、その靜止は他の力或ひは偶然により保たれるのであつて、本性或ひは權利によつて保たれるのではない。

(一)アリストテレスの考をラテン語で表明したキケロの言葉を借りやう。(Tuscul. Quaest. I, 17; De Natura Deorum, II, 16)

(二)Phys. IV, 215, a, 2 (a τ の誤)「すべての運動は、他から力を加へられることによる運動であるか或ひは本性に從つた運場であるか、その孰れかである。他から力を加へられることによる運動が存するならば、本性に從つた運動も存しなければならぬ。なんとなれば他から力を加へられることによる運動は本性に反するものであり、本性に反する

運動は本性に從つた運動よりも後なるものだからである。」——Phys. VIII, 255, a, 2「蓋しこれらのもの〔輕いものと重いもの〕は他から力を加へられることによつて特有の場所とは反對の方向の場所へ動かされるが、本性上は特有の場所へ、すなはち輕いものは上方へ重いものは下方へ、動かされる。」——De Caelo, IV, 5——Phys. V, 230, b, 15「本性上、火は上方へ移動し土は下方へ移動する。これらのものの移動は對立せるものである。火は本性上上方へ移動し、本性に反して下方へ移動するのである。」——De Caelo, II, 296, b, 27「觀察が示す樣に、〔土は〕本性上何處からでも中心に向つて移動するやうに元來形造られて居り、逆に火は中心から外端へと移動するやうに元來形造られてゐるとすれば、土のいかなる部分も、他から力を加へられなければ、中心から離れ去ることは不可能である。」

(三) De Caelo, IV, 308, a, 34「これらのことの研究に手をつけた先行者達の殆んど大部分は重いものの輕いものについて語つたが、その重いもの輕いものとは重さを持つ二つのものの中一が他より一層輕いといふことを意味したに過ぎなかつた。……すなはち一層輕いもの一層重いものについては、ティマイオス篇〔56, 63, c〕に書かれてある樣に一派の人々は、一層多數の同一の部分から成立つてゐるものが一層重いものであり一層少數の同一の部分から成立つてゐるものが一層輕いものであると語つてゐる。……かゝる分析は絶對的な重さ輕さについて何物をも語らないのである。」

(四) De Caelo, IV, 310, a, 23「實際、運動には量に關する運動、形相に關する運動、場所に關する運動の三種類あるが、これらの各に於て變化は反對者から反對者へ或ひは中間者へと生ずるのであつて決して任意のものが任意のものへと變化するのではないことが見られる。これと同樣、任意のものが任意のものを動かすのではない。……これと同じく、また任意のものが任意のものに場所變化を生ぜしめるのではないことを考へねばならぬ。」

(五) De Caelo, IV, 310, a, 34「自己の場所へと移動することは自己の形相へと移動することである。」——Meteorol., II, 363, a, 30,「場所的に最も隔つてゐるものは場所的に反對のものであることを先づ想定しやう。」

(六) De Caelo, II, 293, b, 1「更に、ピッタゴラス學徒は、宇宙の最もすぐれた部分すなはち中央が最もよく護らるべきだとの理由により、その部分或ひはその空間を占める火をゼウスの護り家と名付けてゐる。恰も中央といふ言葉の意義が一義的であり、大きさの中央は同時に事物の中央本性上の中央ででもあるかの如く。」

(七) De Caelo, II, 293, b, 11「場所に於る中央は、出發點よりもむしろ終點に似てゐる。」

しかしながら、もし、要素は本性上世界に於て或る一

定の擴がりを占めやうとする樣に形造られてゐるとするならば、擴がりを否認して終つた後に、またそれが獨立に存在すると主張することになると、人はいふであらう。なんとなれば、獨立に存在しないものは決して目指され得ないからである。その上、アリストテレスは、天體論と名付けられる書物の中で「もし人が現在月の存する場所へ地球を置くとすれば、地球の各部分は〔新しい位置の〕地球へと向はないで今現に存在する處へと向ふであらう」(一)——恰も土の小部分は土へと向はずして、水の內に位置する・土が充たさんとする・擴がりへと向ふかの如く——といふ時、彼自身も擴がりが獨立の或るものであることを認めてゐるのではあるまいか。我々は、土の小部分が土にひきつけられるのでもなく擴がりにひきつけられるのでもないと答へやう。なんとなれば、アリストテレスは、同類のものが作用力としての同類のものにひきつけられることを、否定して居り、また擴がりが獨立に存在することをも同樣に否定してゐるからである。土は本性上水の內では靜止し他の要素の內では運動する樣に形造られてゐるのである。從つて土の各の小部分は土や空虛な擴がりへと向はず、いはば水といふ取圍むもの、親近なものへと向ふのである。動物發生論第一卷の(二)記述によれば、動物の部分にはそれの果すべき役割により或る一定の場所が賦與されてゐる。ところでアリストテレスは世界を一種の動物と看做してゐるが故に、ひかれも强制もされぬ質料の各小部分は、空虛な擴がりが存しないから、親近な部分—その中で質料の小部分は特有の役割を演じ物體全體に最も役立つ—を求めそれへ向つて運動しなければならぬ。

(一) De Caelo, 310, b, 3.

(二) De Gener. Anim. I, 12.

以上述べた如くだとすれば、また自然的場所を親近なるものの結合—これにより動物としての世界全體の中で要素が保たれる—により定義するとすれば、恰も動物全體が動物の部分の場所であるのと同樣に、眞實の意味で場所たるものは、すべての要素の配列と秩序とをそれが取圍むことにより包み保つものでなければならぬ、すな

はち天體〔宇宙〕全體なのである。それ故、アリストテレスは各の不動の境界が第一の場所（この言葉は最も近い場所との意味である）であるといつた後、場所なる名に最もふさはしき共通の場所は天體〔宇宙〕であると附け加へてゐる。或ひは明瞭にいへば、天體〔宇宙〕に於て最も不動なるものは一方では中心他方では表面である、すなはち「天體〔宇宙〕の中心と我々の面する圓運動の最外端面とは、すべての人々に對し勝義に於て一は下であり他は上であると思はれる。なんとなれば一方は常に靜止し圓の最外端面は常に同じ狀態を保つてゐるからである。」[二]——アリストテレスが「圓運動の最外端面」と呼ぶもの[54]が、いかにして不動なのであるかについては、他の機會に說明されるであらう、ここでは、一切のものは天體〔宇宙〕内に場所を占めるが天體〔宇宙〕は決して場所を有しないといふことを示せば、充分であらう。[二]すなはち、或るものはそれ自身で場所を有し或るものは、アリストテレスがいふ樣に、部分によつて場所を有するといはれるが、天體〔宇宙〕の部分はそれの一が他を取圍み天體〔宇宙〕全體の内で場所を有するのに對し天體〔宇宙〕そのものはいかなる他のものによつても包まれないから場所を缺いてゐると說明しやう。[三]この結果、天體〔宇宙〕の最外端面は、一切のものを包むのみならずまたそれ自身は決して包まれないが故に、場所の名に最もふさはしきものと考へねばならぬであらう。

(一) Phys. IV, 209, a, 31 (a 32 の誤)「共通の場所 (κοινὸς τόπος) とは、その内にすべての物體が存する場所、固有 (ἴδιος) の場所とは物體がその中に先づ第一に存する場所……。」——212, a, 26「中心の方向へ包む境界と中心そのものは下であり、最外端の方向へ包む境界と最外端とは上である。」——213, a, 21「それ故天體〔宇宙〕の中心と我々の面する圓運動の最外端とは、すべての人々に對し勝義に於て一は下であり他は上であると思はれる、なんとなれば一方は常に靜止し、圓の最外端は常に同じ狀態を保つてゐるからである。」Cf. De Caelo, IV, 310, b, 7「場所は包むものの境界であり、すべて上下へ運動するものを最外端と中央とは包む……から。」

(二) Phys. IV, 212, b, 18「〔それらのものの〕場所は天體ではなくして、天體の最内端の面であり、運動する物體に接觸せる・靜止せる・面である。それ故土は水の内に、水は空

氣の内に、空氣はエーテルの内に、エーテルは天體の内に存するものであるが、しかし天體は決して他者の内に存するのではない。」―― 212, a, 31「一の物體がそれの外部にそれを包む或る物體を有すればその物體は場所の内に存するのであり、然らざれば場所の内に存するのではない。」―― 212, b, 8「いかなる物體も天體を包まないとすれば、前述の如く、天體は全體として何處かに存在するのでもなくまた何等かの場所の内に存在するのでもない。」

(三) Phys. IV, 212, b, 12「蓋し〔天體の〕すべての部分は或る意味で場所の内に存在する、則に於ては一の部分は他を包むからである。それ故上方の部分は圓運動をなすが、宇宙は何處かの場所の内に存在するのではない。」

しかし天體の外部には物體も空虛も空間も全然存在しないことを、(一) アリストテレスは多くの論議をつひやして斷定してゐる。これらの中空虛に關聯せるものを我々は既に檢討したが、質料が無限に延長し得ないことから導出される論議はいま我々の考究を要求してゐるのである。自然學講義や形而上學やその他天體論と名付けられる書物に於て、(二) 世界が無限に進み得ないことの・種々樣55々な・論據が見出されるが、その中アリストテレスの場所に關する教説を解明し得る論議を選び出さう。

(一) De Caelo, I, 279, a, 11「これと同時に天體の外部には場所も空虛も時間も存在しないことは明かである。」―― De Caelo, II, 287, a, 12「最外端の圓周の外部には空虛も場所も存在しないことが證明された。」―― Cf. Leibnitii ad Clarkium ep. IV, 7 (Erdm. 756, a)

(二) Metaphys. X (現實例では XIII; Phys. III; De Caelo, I.

かくて先づアリストテレスが、繰返し強調してゐることは、世界に於てもし無限が存在するとすれば、各の要素に自然的場所を賦與することは本性上不可能だといふことである。すなはち天體論第一卷に「ものが重さ或ひは輕さを有するとすれば、宇宙には最外端或ひは中心が存在するであらう。このことは宇宙が無限だとすれば不可能である。一般に中心も最外端も存在しない處には、上或ひは下の存在しない處には、物體が移動する場所は存在しないであらう。ところで場所が存在しなければ運動は存在しないであらう。なんとなれば、ものは本性に從つて運動するか本性に反して運動するかその孰れかでなければならぬが、これらの運動はものが自然的場所に存

するか否かによつて定まるからである。[1]」――この同じことを天體論第二卷[2]に於て一層手短かに繰返してゐる。「無限の世界の内には、上或ひは下は存在し得ない。しかるにこれらによつて重さ輕さは規定されるのである。」――上昇するものが無限に上昇し得ないのは何故であるかと人は問ふであらうか。それの答は第一卷に見出される、すなはち「反對方向への移動は反對の場所へ向ふから、もし反對者の一方が定まれば他方も亦定まるであらう。かくて中心が定まる。なんとなれば、落下するものは假令へ何處から下方へ移動し始めるにしても、中心を過ぎて更に進むことは出來ぬからである。從つて中心が定まつたのであるから、必然に上方の場所も定まらねばならぬ。[3]」――この答は訝しいものであり、またアリストテレスが自然學的根據と論理學的根據とを混同してゐることをよく表明してゐる。

(一) De Caelo, I, 276, a, 6; Cf. Metaph. X (現慣例では XI), XI, 14 (IX 1067 a 27) 「或ひは無限定者には上部、下部、最外端、中心がいかにして存在するのであらうか。……六種類の場所が存在するが、これらは無限定者の内には存在し得ない？」

(二) De Caelo, II, 295, b, 8 -Cf. De Caelo, I, 7 (274, b, 7; 275, b, 39 sqq.)

(三) De Caelo, I, 273, a, 8 「蓋し上方への移動と下方への移動とは反對であり、反對方向への移動は反對の場所へ向ふから、もし反對者の一方が定まれば他方も亦定まるであらう。かくて中心が定まる。なんとなれば落下するものは假令へ何處から下方へ移動し始めるにしても、中心を過ぎて更に進むことは出來ぬからである。從つて中心が定まつたのであるから、必然に上方の場所も定まらねばならぬ。」

それにも拘らず、我々の世界の外部には他の世界從つて他の場所が存在し得ないのは何故であるかが問はれねばならぬと思はれるであらう。アリストテレスは絶對に存在し得ないと考へてゐる。すなはち、我々の世界の外部の何處かに他の世界が存在するとしても、それは必然に同じ要素から成立つてゐなければならぬであらう。蓋し質料の中に潜勢的に存在してゐたものはすべて、土や水や空氣やエーテルによつて、作用へと導かれるからである。ところで同じ要素には同じ力同じ作用樣式が賦與されねばならぬ。もしさうでなければ、それらの要素は

名は同じであつても、實質的には異るであらう。從つて土や火の小部分がかの世界に於て場所を占めるとすれば、それらは、我々の世界の土や火の小部分と同樣、それの自然的運動によつて我々の世界の中心または最外端へ向はねばならぬ。しかし、我々の宇宙の中心へと移動する土の小部分は、かの世界の中心から外方へと去り行き、我々の世界の最外端へと向ふ火の小部分はかの宇宙の中心へと近附き行くが故に、その結果として、或ひは同じ物體がかの世界では中心へこの世界では最外端へ移動する—このことはアリストテレスには絶對に理に反すると考へられた—といはねばならぬか——或ひはかの世界と我々の宇宙とは同一物であると思はねばならぬか、この孰れかである。(一)

(一) De Caelo, I, 8.

同樣の論證が少し先で見出されるが大體次の樣に要約される。すなはち、宇宙の外部に置かれた物體はすべてそれに特有の場所を占めるか或ひは特有ならざる場所を占めるかの孰れかであると思はれる。ところで、もし特有ならざる場所を占めるとすれば、その場所を特有な自然的場所としてゐた或る他の物體が押出されたのでなければならぬ。從つてその場所が包まれた物體の特有の場所だといふにしても或ひは特有ならざる場所だといふにしても、孰れにせよ我々の世界の外部に或る自然的場所を樹てねばならぬ、このことは理に反する、なんとなれば要素の自然的場所は我々の宇宙の內部に包まれてゐるからである。(一) これらの論證やその他同じ問題に關せる論議を自然學第三卷第四卷—そこでは、無限者の中では運動が存在し得ず考へられ得ないことが論證されてゐる—と比較するならば、一聯の論據—これによつてアリストテレスが、先づ自然運動から自然的場所へ、次に自然的場所の觀念から無限空間の否定へと、歩みを進めた—が見出されるであらう。これらの結論を大體次の樣に要約しやう。

(一) De Caelo, I, 9.　Cf. Phys. III, 5.

(二) Phys. III, 5; IV, 8.

或るものは自己の下降運動力により下方へ移動し或る

ものは上方へ移動するが自然運動は自然的場所以外へは向ひ得ないことの結果として、各の要素すなはち土、水、空氣、火、エーテルは世界に於て或る特有な場所を占めなければならぬ。しかし空氣の内に位置を占めた土の小部分の樣に他の要素の内に位置を占めた物體は、自己の特有の領域へ立戻らんとするものとしてこの要素の内で或る一定の通路を保つてゐるが、これに對し無限の要素の内に於ては、或ひは種々の運動を定める何等かの差別も見出され得ないか、或ひは動かされた物體が或る特定の方向へ移動することの理由が何等見出されないか、この孰れかであるからして、必然に要素は有限であり有限な要素は有限な世界に於て有限な場所を占めなければならぬことになるであらう。かく考へるならば、世界の外部にいかなる物體を想定するにしても、その物體は同じ要素から成立たねばならぬであらう、なんとなれば質料の中に潛勢的に含蓄されてゐたものが、我々の〔世界の〕要素として顯現したのだからである。しかしながら同じ要素は同じ自然運動を有し、要素の自然的場所は我々の宇宙の内部に包まれてゐるから、宇宙の外部に置かれた物體は直ちに我々の世界に滑り込むであらう。從つて宇宙の外部に場所を與へたのは不當だつたのである。それ故自然運動の考察から歸結されることは、世界は一種の動物であり、單純要素は、動物の部分と同樣、それの特有の場所に於てそれに特有の役割を演じ、その場所を失へばそれを求めそれを再び得ればそれを保持するといふことである。また歸結されることは、一の物體にとつてはそれを包む他の要素は第一の〔最内奥の〕場所（locus primus）の役をなし、要素そのものにとつてはそれを取圍む要素は特有の場所（locus proprius）の役をなし、最後に一切のものにとつては天體〔宇宙〕は共通の場所（locus communis）の役をなしてゐることである。從つて天體〔宇宙〕の各部分は他の部分により取圍まれる限り場所を有してゐる。しかし天體〔宇宙〕全體の外部にはそれを包み得る空虛も物體的なものも存しないから、天體〔宇宙〕全體は場所を缺いてゐるのである。(一)

(一) ヴォルテルの主張によれば（Wolter, De Spatio et Tem-

Pore, Bonnac, 1848; p. 33—35) アリストテレスは場所について論じたのみならずまた「天體の最高表面から中心の地球に至るまであまねく世界の物體全體にゆきわたる」「絶對」空間についても考究した。この全解釋は我々がアリストテレスの教說について說明したことにより論駁される。すなはち、この樣な空間は假令へ存在するにしても、空虛または我々の心が考へ出した或る擴がりに還元されるであらうが、孰れもアリストテレスの教說とは全くかけ離れたものである。しかしここに持ち出された論議は考察されねばならぬ。

アリストテレスは場所についての反對說に戰を宣し既述(p.8)の如くこの問題の困難さを指摘し困難の在り場を明かにしてゐるが、このことを述べた部分で彼は場所が「三つの擴がりを有する」(209, a 4) と確に書いてゐる。しかしアリストテレスは彼以前の見解をば、他の見解を排擊して終つた後、始めて述べてゐるのである。

またヴォルテルが天體論第四卷から引用してゐる論議—「なんとなれば場所も亦中心と最外端との二つだからである。」ところでこれらのものの中間者(τὰ μεταξύ)が存し、それは中心と最外端との各に對して他者であるといはれる。蓋し中間者はこれらの兩者に對して中心や最外端の意味を有するからである。それ故水や空氣の如く他の重いもの輕いものが存在するのである。」(De Caelo, IV, 4 {312 a 22})—も揺がすべからざるものではない。なんとなれば「これらのものの中間者」といふ言葉は何等かの中間的な空虛を意味するのではなく、自然的秩序に配列された物體的要素 それは世界の最外端に近く存するか中心に近く存するかによつて輕いとか重いとかいはれる—を意味することを我々は見出した。

さてヴォルテルは τὸ κενὸν ἀνάγκη τόπον εἶναι· εἰ γὰρ ἐστιν ἐστερημένον σώματος (Phys. IV, 214, a, 16) といふ言葉から、「空間は世界の廣袤全體に擴がる・物體に充ちた・或るものである」と結論してゐる。これほどアリステレスの思想からかけ離れたものはないと思ふ。すなはち ἐστερημένον σώματος {「物體を缺いたもの」} といふ言葉は τὸ κενὸν {「空虛」} にかゝるべきではなく (さもなければこの言葉が不必要となるであらう)、τόπος {「場所」} にかゝるべきである。從つてアリステレスの見解は「空虛は、もし假に存在するとすれば、物體を缺いた場所である」といふ樣に(ラテン語に)譯される。しかしアリストテレスは、場所は決して物體を缺き得ないと、考へてゐるのである。

自然學講義の二箇所 —蓋し空氣と水或ひは水の部分は、それが存する場所に於て、位置を轉換するのであつて、それが生じた場所 これは天體(宇宙)全體の場所たる場所の部分である に於て位置を轉換するのではない。」(Phys. IV, 211, b, 27)「すべてのものが本性上それの特有の場所

に止まるといふことは理のないことではない。なんとなれば、この部分がその場所に對して有する關係は、例へば人が水または空氣の部分を動かした時分離せる部分が全體に對して有する關係と同樣だからである。」(Phys. IV, 212, b, 32 (p. 33 の誤)) から導出された論議はかなり精緻なものと思ふ。ヴォルテルはこれらからして、各の場所はいはば全天體(宇宙)によつて境界された或る空間の部分であると結論してゐる。しかしヴォルテルは τὸ τοῦ τοῦ οὐρανοῦ (「天體全體の場所」)といふ言葉が何を意味するかを全然理解してゐなかつたと思はれる。なんとなれば、天體(宇宙)全體は場所を缺くが、天體の部分はその一が他の内に包まれる限り場所を有すると、アリストテレスは繰返し斷定してゐるが故に τοῦ τοῦ οὐρανοῦ (「天體全體の」) といふ言葉は全天體を意味するのではなく(それは場所を缺いてゐるからである)、天體の部分全體を意味してゐることは明である。從つてアリストテレスが αὐτοῦ τοῦ τοῦ οὐρανοῦ (「天體全體の場所」)と名付けてゐるものは、世界の・統體をなす・物體的な容積に他ならない、それは部分 その部分の一は他を包む を有するが故に、それはそれの部分の場所なのである。從つて各の自然的場所すなはち土水空氣火エーテルは統體をなす世界の部分であり、かくて「天體全體の場所たる場所の部分であり、」更に「分離せる部分が全體に對して有する關係と同樣」なのである。從つてここに問題とされてゐるのは、物體的な天體または世界なのであつて、天體の中心と最外端との間に存する空間なのではない。

殘るところは、範疇論から引用され、ヴォルテルが最も主要だと考へてゐる次の論議である、すなはち「また場所も連續的なるものである。なんとなれば物體の部分は或る場所を占め、共通の限界に接してゐるからである。それ故物體の各の部分が占める・場所の・部分も亦、物體の部分が占めるのと同じ限界に接してゐることになる。その結果場所も亦連續的であらう、蓋しそれの部分は共通の限界に接してゐるからである。」(Categ. 6. (5, a, 8)) このことから、ヴォルテルは、「空間はすべてのものの中に存在するから連續的物體の部分さへ空間を缺いてはゐない」ことを強ひて結論しやうとした。しかしながら、アリストテレスの言葉を注意深く檢討すれば、ここで問題とされてゐるのは、物體のすべての部分ではなくして、場所を有する物體のみであることが理解されるであらう。從つてアリストテレスは「場所とは物體的なるものを自己の中に包むものであるから、場所が連續的でなければ物體の部分は連續的ではあり得ない」といふ樣に論じたのである。しかし物體のいかなる部分には場所が賦與さるべきであるか、いかなる部分には拒まるべきであるか、の問題は範疇論では顧慮されてゐない。彼がその箇所で「物體の各の部分が占める・場所の・

部分」といつてゐるが、この一句は「場所の内に存する・物體の・各の・部分」の意味に解しなければならぬ。ところで自然學講義に於て、場所は物體のすべての部分に現勢的に屬すべきものではなく、物體の表面に位置するものにのみ屬すべきものであると、立論されてゐる。從つて範疇論に書かれてある事柄は物體の表面に聯關せるものであつて、物體全體に聯關せるものではない。

第七章

アリストテレスの場所の定義はいかなる困難に逢着するであらうか

場所については、自然學講義第四卷に於ては上述のことがら以外殆んど何も說かれてゐないが、これだけで滿足だとするのならば、アリストテレス自身の見解の內奧に立入らず彼を皮相に判定するに止るであらう。なんとなれば、アリストテレスの敎說を深く洞察し核心をついて解釋するのでなければ、場所についての記述は、彼の他の敎說と全然矛盾するであらうし、また場所論自體が自己矛盾してゐると思はれるからである。三つの困難が

存すると考へられるが、先づこれを指摘し、次に出來れば、これを論破しやう。

さて、アリストテレスは、場所が不動でなければならぬと定義した後、場所の名に最もふさはしき最高の場所は天體〔宇宙〕である、といつてゐる。しかしながら天體は不動でないのみならず、一切のものの中で永恒に運動する唯一のものであると、アリストテレスは考へてゐる。從つて一面からいへば、場所は不動であり、他面からいへば眞實の意味で場所といはれる天體は永遠に運動するといふことになるであらう。既にテオプラストス(一)はこの困難を認めてゐたが、アリストテレスが自然學第四卷に挿しはさんだ「天體も場所の內に存すると我々が特に考へる理由はそれが絕えず運動するからである」(二)——恰も少し先の箇所で天體は場所を缺いてゐるといはないかの如く——といふ言葉によつて、この困難は增しこそすれ減ずるものではないと思ふ。

(一) Theophr. ap. Simplicius, ed. Diels, p. 604, l. 5 sqq.「テオプラストスも亦『自然學者論』に於て、場所は運動する

ものであらうか……と思ひ惑つてゐることを知らねばならぬ。」

(二) Phys. IV, 211, a, 13.

第二の困難へと歩を進めやう。各々の要素は、圏が圏を包む如く、下位の要素を包むが、各の要素は下位の要素に對して場所であつて、特有の場所についてのアリストテレスの見解を理解するにはこれ以外に道のないことを、我々は示した。從つてもしも、アリストテレスの考の如く、「場所は不動であらうとする」のならば、各の要素も不動であるとしやう。しかしながら要素は運動變化し同じ場所に止り得ないことを、アリストテレスは強調してゐる。すなはち發生消滅論第二卷に於ては「もし各の要素がそれの場所に止つたとすれば、……それは分裂して了つてゐたであらう。……何れの要素も定められた場所に止り得ないのである(一)」と書かれてゐる。このことからして、假令へ場所が不動であらうとしても、天體〔宇宙〕内に位置する要素は、自然的場所の役割を演ずると共に運動もするといふことが結論される。

(一) De Gener. et Corrupt. II, 337, a, 11「なんとなれば、もし各〔の要素〕がそれの空間に止つたとすれば、……それは既に分裂して了つてゐたであらう。……しかし要素は變化するが故に、いづれの要素もそれに定められた空間に止り得ないであらう。」

最後に第三の困難はアリストテレスが第一の場所と呼び我々が最内奥の(proximus)場所と名付けるものから生ずる。第一の場所とは包むものの内表面である、例へば第一の場所とは空氣中に位置する土の小部分に觸れこれを取圍む・空氣の・表面をいふのである。しかしながら或るものは場所を現勢的に有し、或るものは潜勢的に有するから、觸れるものから分離せるもののみが場所を現勢的に有するのであつて、またこの理由により接觸せるもの—連續せるものでなく—と名付けられ得るのである。しかし包まれたものが不動に止る限り、包むものと包まれたものが分離してゐるといふ理由は毫も存しない、なはちこれらの二つと見えるものが結びついて一の統體をなす物體が生ずることもあり得る——ところで、接觸的だと考へられてゐたものが連續的なのである

から、包まれたものと呼ばれるものは、現勢的に場所を有せず、潛勢的に有するに過ぎない、ことになるであらう。前述の如く、分離せるものが運動する時、それは現勢的に場所を自らのものとして請求するであらう、從つて運動は物體の結合を破り、また運動は我々の疑惑をよび起すのである。右の如く考へるならば、驚くべき・殆んど信ずべからざる・結果が生ずる、物體が場所を所有するのは、それが物體から離れることが必要だといふことになる。すなはち、包まれたものに對し、それに觸れそれを包む表面が場所の役割を最もよく果すのは、包まれたものが自ら遠ざかり、それの伴侶から離れる時である、しかしそれはもはや同じ表面に觸れられも包まれもしないであらう。從つて、或ひは物體はそれの場所から遠ざかつた時それの場所を有するのであるといはねばならぬか―これは全く理に反すると思はれる―或ひは場所は物體に追從して運動する・包むものの・境界だと考へねばならぬか、しかしかく解するならばアリストテレスが第一の場所は不動であらうとすると述べた定義から遠ざかるであらう―、この孰れかである。

これを要するに、運動する物體は、第一の場所としての、包むものの不動の境界によつて包まれ、單純要素は、特有の場所としての、それを取圍む不動の要素によつて包まれ、最後に一切のものは、共通の場所としての、天體〔宇宙〕の不動の表面によつて包まれてゐると、我々はいつた。しかるに天體〔宇宙〕は運動し、要素は運動し、各の包むものの表面は運動するのである。從つて我々はアリストスレスの見解をそのまゝ述べてゐるわけではない、すなはち我々は徐に觀察するため、運動してゐなければならなかつた多くのものに對し、停止するやう命じたのであつた。いまや、アリストテレスの世界に、中斷されてゐた運動を再び與へるとすれば、場所にはいかなることが起るであらうか、これを究明することが勞苦に價することである。

第八章

いかにして難點は解決され得るであらうか。

天體は可動であると同時に不動であるといはれ得るのはいかにしてであるか、これについては天體論第二卷から推察し得る。すなはち、天體が球形であるのは何故かとの問に對し、アリストテレスは「他の任意の形を天體に與へるとすれば、天體は圓運動をなす間に場所を變ずるであらう」(二)と答へてゐる。自然學第八卷に於て球の特性につき同樣のことを論じた、すなはち「球は或る意味で運動すると同時に靜止してゐる。なんとなれば球は同じ場所を有するからである」(三)これと同じ見解を次の言葉で要約してゐる、すなはち、「圓運動をなす物體が運動を始める場所と、それが運動を終る場所と、は同一である」(三)ところで、彼は天體論第一卷に於て「球全體は等しい場所に止つてゐるのに、球の部分は場所を變じる」(四)と書いたが、この箇所以上に明瞭にまた巧みにこの問題に光を投じた箇所は何處にもない。

(一) De Caelo, II, 287, a 二更に、宇宙が圓移動をなすことが明かにされまた假定されて居りそして最外周の外部には空虛も場所も存在しないことが論證されたのであるから、これらの理由によつても天體は球形でなければならぬ。

(二) Phys. VIII, 265, b, 1.

(三) De Caelo, I, 279, b, 3 (b と の間)

(四) De Generat. et Corrupt., I, 320, a, 1.

しかし球が同じ場所を保つといふのは、一體いかなる意味に於てゝあるかが、問題となる、すなはち、アリストテレスは、場所を占めるものの境界の間に介在する擴がりが場所だとする見解を否定した。しかしいま、廻轉する球は常に同じ場所を占めるといふ限り、場所とは運動する球が占める不動の擴がりであると定義してゐる樣に思はれないであらうか、

しかし、アリストテレスは、問はれゝば大體次の樣に答へたであらうと思ふ。所謂最高(最外端)の天體とは一定の座に固定せる星辰を保持するものである。その天體は他のいかなるものによつても取圍まれたり觸れられたりしないから、それは場所を有せず從つて場所を變じ得ないのである。しかしながら天體の部分は、その一が他を取圍むから、場所を有する、從つて天體が圓運動をなす限り部分も場所も變じなければならぬのである。しかし、

部分はいかにして場所を變ずるのであるかを理解せんとするならば、次の樣に考へるがよい。我々の上方で天空へと直線を引くならば、その直線は天體の最高表面と點Zに於て交る、その點は、不動の地から引かれた不動の線の最外端に位置を占めるが故に、不動である。そこでこの點に人が坐るとすれば、天體の部分はその人に對し場所を變ずるであらう、なんとなれば各瞬間毎に異つた星が過ぎ行くのを見るであらうから。從つて、恒星は相互に同じ順序を保つにしても、Z點に坐してゐる人に對しては、右にあつた星が左に、遠くにあつた星が近くに見られるが故に、部分の配列は變化すると思はれるであらう。かくて天球は場所を缺くが、天球の部分は場所を有し場所を變ずるといふことになるのである。(一) ところで他の任意の球を考察するならば、アリストテレスの見解は尙ほ一層容易に解釋されるであらう。すなはち球が周圍の或る物體に取圍まれ、その球の場所は周圍の物體の內的境界である時には、球は圓運動をなす限り同じ場所を保持してゐる、なんとなればそれは同じ境界內に包まれてゐるからである。しかしながら球の部分は、各瞬間毎に同一の境界の異つた部分に觸れるが故に、場所を變ずるのである。

(一) Phys. IV, 212, a, 31「一の物體の外部にそれを包む或る物體が存在すれば、前者は場所の中に存在するのであり、然らざれば場所の中に存在するのではない。それ故、場所の中に存在せざる水が假にあつたとすれば、その水の部分は運動するであらうが（蓋し一の部分は他の部分の內に包まれてゐるからである）、水の全體は或る意味では運動し或る意味では運動しないであらう。なんとなれば水は全體としては場所を同時に變じはしないが、それは部分の場所なるが故に圓運動をなすであらう。」

これを要するに、アリストテレスは圓運動と直線運動とが異ることを主張しやうとしたのである。我々の理解し得る限りに於ては、直線運動をなすものとはそれの部分がもの全體の働きにより場所を變ずるものであり、圓運動をなすものとはそれの部分の働きにより運動するものなのである。すなはち直線移動をなすものは場所を變ずる、換言すれば、ものの內に包まれた部分は場所を單に潛勢的に有するに過ぎないから、場所を單に潛勢的に

變ずるに過ぎない。しかし同じ場所を保持する圓運動は上述の法則によつて生じたものである、從つて、球形をなす表面の部分は場所を變じても、球そのものは場所を變じない。從つて、直線運動に於ては部分は全體により運動し圓運動に於ては全體は部分により運動するといへば、アリストテレスの見解と思はれるものが最も簡潔に要約されるであらう。

かく考へるならば、かなり晦澁な二つの見解に光が投ぜられる。その中の一を自然學第四卷からとり出して次の樣に〔フラン語に〕譯さう、「圓運動の最外端は、すべての人々に對し、勝義に於て、上であると思はれる、……なんとなれば圓の最外端は常に同じ狀態を保つてゐるからである。(一)」すなはちアリストテレスが「圓の最外端」と名付けるものを我々は「Z點」と呼んだが、この點を通つて廻轉する天體の多くの部分が次々に過ぎ行くにしても、その部分の各々は、それがZ點の中にある限り、我々に對して同一の狀態を保つてゐるのである。上述の見解よりも遙かに晦澁な見解が自然學第六卷に見出される。「第一に球の部分は決して同じ場所に止らない。第二に全體の球そのものは常に運動する、なんとなれば、A點から始まる週邊はB點C點その他の點から始まる周邊とは同一でないからである、尤も音樂の素養のある人間は人間と同じだといふ場合の樣に偶然的一致を意味するのならば別問題であるが」(二)——これらの引用句は、もし我々が上述のZ點に登つてみるならば、簡單に解釋されるであらう。すなはち廻轉する天體の諸點ABCは順次に不動の點Zを通過するから、Z點に立つてゐる人にとつては、不動のZ點を順次に通過するABCその他の諸各點から始まる天體の周邊は同一ではないであらう。從つて天體全體は場所を有せず場所を變じないにしても、その人からみれば天體はその姿を變ずるであらう。しかしこれらの姿は無數であるが、天體は同一であると考へられる、恰も音樂その他の術に携り外見の樣々に異る人間も、人間であることに變りはないのと同樣である。

(一) Phys. IV, 212, a, 21「それ故天體の中心と、我々の面する廻轉運動の最外端とは、すべての人々に對し勝義に於て一

は下であり他は上であると思はれる、なんとなれば一方は常に靜止し圓の最外端は常に同じ狀態を保つてゐるからである。」Vide p. 53.

(二) Phys. VI, 240, a, 34 {a 33 の誤}

シンプリキオスその他の批評家は、アリストテレスが一方では圓運動は場所運動だといひつゝ他方では天體が場所の內で運動することを否定したのは何故であらうかと、訝つてゐるが、(一)この疑に對しては上述の解釋と同樣に答へやう。すなはち、圓運動をなす任意の球の部分は場所運動をなすが、球全體は常に同じ境界內に包まれてゐるから、假令へ不動だとはいひ得ないにしても、球全體は場所を變ぜず、從つてまた場所運動をなすものでもない。しかし我々が任意の球についていつた事柄は、天體—それの各部分はアリストテレス自身がいふ樣に場所を有し場所を變ずるが、表面全體は場所を有してゐないため全然場所を變じ得ない—には遙によく妥當するのである。

(一) Simplicius, ed. Diels, p. 602, l. 23「從つてこれらの考察の結果、圓運動は場所そのものに聯關せる運動であることが疑もなく明かとなる。ところで場所運動をなすものは、また場所の內に存する。從つてこれらの考察の結果によれば、全天體も恒星も場所の內に存するのである。」

いまや、天體から下位の要素へと眼を移さう、上述の第一の問題から第二の問題へと歩を進めやう、各の要素は、アリストテレス自身の證言によれば、運動するのに拘らず、それが自然的場所といはれ得るのはいかにしてであるか、この問題を明かにしたいと思ふ。

先づ第一に要素が結びつくのは、隣接せるものがいかなる親近關係にあることによるのであるかを、アリストテレスは再三再四說明した。すなはち、質料とは多くの形相がそれから展開されるものを意味するのと同樣に、各の要素の內には他の要素が既に潛勢的に包まれてゐるのである。(二)それ故、例へば水から空氣が生じ、空氣から火が生ずる樣に、要素は要素から生ずる、その結果接觸せるものはすべて血緣關係にあるといはれ得、相互に隣接關係を保つのみならず、また親緣關係を保つてゐるのである。まさにこの理由によつて、火は空氣の似像を、空

氣は水の似像を有してゐる、恰も隣接せる要素は或る同一種に歸屬するかの如く。[一] しかしこの血緣關係は驚くべきものであり、それは交互轉換をなすであらう。すなはち氣象學第一卷の記述によれば、太陽光線により稀薄となつた水は空氣に變じて上昇するが、次に熱を失へば逆に空氣から水が生じその水は下降するのである。[二] この同じことが自然學第四卷に說かれてゐる「水は潛勢的に空氣であり、空氣は、異つた意味に於て潛勢的に水である。[四]」

(一) Phys. IV, 213, a, 1「空氣もまた水に對してこれと同樣の關係を有する。なんとなれば、一方はいはば質料であり、他方はいはば形相である、すなはち水は空氣の質料であり空氣はいはば水の現勢態だからである。蓋し水は潛勢的に空氣である……。」——Cf. Meteorol. I, 2, 3, 4.

(二) De Caelo, IV, 310, a, 33 [b 10 の誤]「物體が自己の場所へ移動することは、類似せるものへと移動することである。蓋し、隣接せるものは相互に類似してゐる、例へば水は空氣に類似し、空氣は水に類似してゐる。」——Phys. IV, 213, b, 29「各の物體が自己の場所へ移動するのは當然である。なんとなれば、他から力を加へられることによらずして隣接してゐるもの、接觸してゐるものは同種だからである。」Cf. De Caelo, IV, 4.

(三) Meteorol. I, 346, b, 24「……濕氣は太陽の熱やその他上方からの熱によつて氣化され上昇する。しかしそれを上昇せしめる熱を失へば、……氣化せるものは、熱を失つたことと場所の冷いこととにより、冷くなつて收縮する、そして水が空氣から生ずる。生じた水は再び地球へと下降するのである。」

(四) Phys. IV, 213, a, 2 [a 3 の誤]

右に述べた如くであり、また水は空氣に空氣は水に變ずるからして、要素の變化はいはば軌道上を循環してゐるのであつて、かくいふを許されるならば、自己の系統に由來する性質の再生といふ圓環の上を運動してゐるのだとしなければならぬ。血緣關係にある連續的要素例へば空氣と火からは、或る統體—その統體全體は常に同じ場所を占めるが、その統體の部分は相互に場所を交換する—が生ずる。從つて天體の似像たる要素が運動するのは、自己自身によつてでなくして、むしろそれの部分によつてである。そして最高天體に固定せる星辰は、それが廻轉運動をなす間、相互に同じ配列を保有するのと同

樣に、地から天まで配列された要素も同じ秩序同じ連續を維持するのである。尤も各要素の個々の部分は相互に形と場所とを交換するであらうが。

これらのことは單に理によつて到達されるに止らず、またアリストテレス自身の言葉によつても斷定される。すなはち、氣象學第一卷の記述によれば、水が空氣に空氣が水にと相互に變化するのは、太陽の圓運動を模倣せるものである、換言すれば水と空氣とからは、流れ下ると同時に逆流する一種の川が生じるのである。(一) また、彼が發生消滅論第二卷に於て（恐らくはヘラクレイトスの或る見解を頭に置きつゝ）(二) 記述せるところによれば相互に轉換するものは圓運動と同種のものに歸屬する、水から空氣への變化と空氣から水への變化とは、上昇下降する直線に沿つて生ずるにしても、それが連續であるといふ點では圓運動を模倣してゐるのである。(三) 更に、この模倣の原因を同卷で明かにしてゐる、すなはち、天體の圓運動は最外端から中心へと各の最も近い要素に傳へられ、その運動から太陽の圓運動が生れ、太陽の圓運動から季節の交代が結果し、最後に季節の交代の循環によつて水と空氣との變化が持續するのである。(四) このことから、天體が共通の場所だといはれる理由と、要素が自然的場所だといはれる理由とは、同じであることが結論され得る、すなはち要素が天體に倣つて運動する時、天體はまた同一領域内で廻轉運動を模倣するのである、尤も天體は全然場所を缺き從つて勝義に於る場所であるのに對し、天體に包まれた單純要素はそれ自身によつてでなくいはゞ天體の代理もしくは模倣によつて場所の役割を演ずる、といふ差別は存する。

(一) Meteorol. I, 346, b, 35「太陽の圓運動を模倣せる圓運動が生ずる。蓋し太陽が黃道上で南北に移動すると同時に、濕氣は上下に移動するからである。この現象は、上流から下流へ下流から上流へと循環して流れる・空氣と水とから成る・川に喩へて考へねばならぬ。」

(二) Diog. La. IX, 8「そして〔ヘラクレイトスは〕變化を上り道下り下り道〔と名付け〕これによつて世界は生じる……。」

(三) De Gener. et Corrupt., II, 337, a, 1「それ故に、例へば單純物體の如く、受動(πάθη)と能動(δράσις)によつて相互に變化し得るすべての他のものもまた圓運動を模倣する。蓋

69

し、水から空氣が生じ空氣から火が生じ火から再び水が生じる時は、生成は、再び元へ立ち戻るが故に、完成したといふ。その結果、圓運動を模倣する直線運動もまた連續的なものである。」

(四) De Gener. et. Corrupt., II, 338. a. 17「これらのことは充分に理のあることである。すなはち他の理由によつて圓運動と天體運動とは永遠的であることが明かにされたのであるから、これに屬する運動これに依存する運動は必然に生じ存しなければならぬであらう。なんとなれば、もし圓運動をなすものが常に或るものを動かすとすれば、また必然にそれらのものの運動も圓環的でなければならぬ。例へば上天に於る移動が存在すれば、太陽はこれと同樣に圓運動をなし、太陽がかく運動することによつて季節は生じてはまた元に戻り、季節がかく生ずることからして、それの影響のもとにあるものもこれと同樣に運動するのである。」

殘る問題は、第一の場所を定義する際にひきこまれた難關から脱れ出ることである。第一の場所はそれの素性が殆んど消え去つてゐるので、把へ難いものであるのを見出す。すなはち、第一の場所とは包むものの境界であると定義され、包むものとは運動する物體を取圍む不動のものをいふのであるから、その結果包むものが場所の力と名とを自らのものとして請求する權利を最も有するのは、包まれた物體が離れ去つても包むものに變りがないことを明示する時であるといふことにならねばならぬ、しかしこの樣な包むものはもはや場所ではない。從つて物體が第一の場所を捨て去つた時こそ第一の場所を所有するのは、いかにしてゞあるかゞ問題となる。ところでこれらの問は我々に甚大な好奇と疑問をよび起すであらうが、これらに對して我々は想像をたくましくすることをやめて、むしろアリストテレスが說いた何れかの論議によつて答へやう。

天體は圓運動により一切のものの共通の場所を不動の境界の内に包み、下位の要素は同樣な廻轉運動により圓運動を模倣し自然的場所相互の不動な配列と秩序とを保持するが故に、圓運動の第三の種類が存するといふことは理に協つたことである、そしてこれによつて運動する場所に關する我々の第三の論爭が排除されるであらう。しかし自然學講義第四卷に於ては、物體が充實せる空間内を運動し得るのは、一物體に他の物體が繼起しいはば

渦卷運動をなすものの・統體をなす・系別が連續してゐる時のみであると書かれてゐる。このことは既にプラトンによつて表明されてゐるので、そのためアリストテレスはこれを詳細に論述せず簡單に述べた。しかしながら、アリストテレスの世界に於ては一切のものは充實し一切のものは運動し得るが故に、他の要素の中に位置する任意の物體の運動からは、天體の圓環的な廻轉運動を模倣せる一種の渦卷運動が恐らくは生れ出るであらう。從つて、もし土の小部分が空氣の中に貫き入るならば、それは空氣の小部分を推進め、またこれによつて他の小部分も推進められるから、自己の前方へ傳へた運動を再び後方から受取ることになる、その結果假令へその運動が直線的に進むにしても、それは、運動する圓環に沿ひ徐に運動するものの軌道を形造るであらう。この圓環はしかし自己自身によつて運動するのでなくむしろそれの部分によつて運動するのであるから、恰も流れが河床に包まれてゐる樣に、その圓環は不動の境界内に包まれて居て、取圍まれたものは常に同じ場所を有するのである。從つて、もし第一の場所とはその中で運動する圓環が廻轉する表面であるとするならば、第一の場所は不動であり、且つ包まれたものは運動するのであり、第一の場所が場所たる名譽を享受するのは、包まれたものが遠ざかることによるのでなくして、同じ領域内に取圍まれた圓環の現存することによるのである、といふ結論を下し得るであらう。

(一) Plato. Tim. 58 E, 59 A (St. 59 a 1-4 の誤)「火は空虚の中に消え去らないから、それがまたそこを去ると、隣接せる空氣は押され、この空氣は運動し易い・濕氣を帶びた・容積を火の占めてゐた坐處に押入れ、それを自己に結合せしめる。」

(二) Phys. IV, 215, a, 14「その上、拋げられた物體は、それに衝擊を與へたものが、それに觸れてゐないに拘らず運動する、このことは、或ひは或る人々がいふ樣に、相互に場所を轉換することによるのか、或ひは押された空氣が……押すことによるのか、その孰れかである。」

(三) アリストテレスは、すべての運動が圓運動であるとは主張してゐないのみならず、かゝる考を全然否定してゐる、すなはち「移動は必ずしも圓運動ではなくまた直線運動の場合もある」(Phys. IV, 215, a, 19) しかしながら、この箇

所で問題とされてゐるのは性質變化。それは或る意味で回運動を模倣するにしても、天體の中心から最外端へ走る直線に沿つて生じる—なのである。しかし場所運動は、假令へ直線運動であるにしても、回運動を生み、いはばそれを背負ひ得るのである。

第九章

アリストテレスの場所論はいかなる起源、意味を有し、彼の形而上學自然學の教説といかなる血縁關係を有するのであらうか。大多數の人々は空間について論じたのにアリストテレスは場所について論じたのは何故であらうか。

72

アリストテレスが空間を場所に置換へたのは何故であらうか、このためいかなる困難に陥つたであらうか、また、かの教説—これにより、空間に關して重要だと思はれる問題を解決せずして、むしろ回避してゐると思はれる—に導かれたのは、いかなる蔽はれた考いかなる論據のつながりによるのであらうか、これらの問を、遂にいま、僅な言葉で説明し得るであらう。

アリストテレスは、大多數の近代の哲學者と同樣に、空間とは或る包むものであり、その内にすべての物體的なるものが位置を占め運動するのであると考へてゐた。しかしながら我々はカントに從つて認識を質料と形式の二要素に分ち從つて物自體の性質そのものは空間を缺くと考へるが故に、物體は空間の内に存在するのみならず、また空間は物體の内に存在すると考へるのである、その結果、物體全體の場所について論ずるためには、部分の場所について從つてまた延長そのものについて論じなければならぬと思はれる。從つて延長と物理的性質とを區別すれば、物體の存する場所が物體に必要なるのみならず、また延長を結合するための場所が性質に必要であつた。このことから、我々が問題とするのは場所ではなく73空間であることが結論されるであらう。

また、我々が形式と質料とを區別することから結果することは、假令へ有限世界に於てはすべてのものが充實してゐるとしても、我々の空間は空虛であり無限である

といひ得ることである。すなはち、すべての性質變化は有限なる圓環内を循環するから、或る領域外では感覺により知覺されるものは何等見出され得ないが、思惟によれば更に進むのであつて、我々は何等かの最大の空間に包まれ得ない、もし包まれれば直ちにそれを超出しやうとするのである。從つて近代人は、存在の二形態すなはち質料と形式とから成立つ具體的なるものと自由な解放された形式とを樹ててゐるのだから、質料と形式とから成立つ各の具體的なるものは有限であり形式は無限に進むといふことがあり得ると、我々は解してゐるのである。

我々は、空虛な空間が何處かに存在するか或ひは少くとも心によつて把へられるといふことが理に反するとは、もはや考へない。すなはち場所と延長を定義して、物體の延長とは部分の結合から生ずるものであり場所は物體の結合から生ずるものであるといふが故に、空間と呼ばれるものはそれによつて結合が生じ變ずるもの、すなはち延長と運動の條件なのである。從つて二つの物體が世界に於て、感覺により知覺され何等かの性質により規定され得るいかなるものによつても分たれてゐないといふ風に、配置されてゐると想定するならば、しかしまた、もし自己が運動しなければ一の物體から他の物體へ移り得ないとするならば、運動の成立つのは釣合の變化に於てであり全然存在しないものは變化し得ないが故に、釣合も釣合の變化も變化すべき釣合の條件も、眞に存在する或るものであるといはねばならぬであらう。ところで釣合の變化をなすもの或ひは少くともそれを自らの中に受容れ影響を受けるものを、我々は空虛な空間と名付けてゐるのである。それ故、性質も力も缺き全然働かないものが、いかにして存在し得るかと問はれるであらうが、この問に對しては、存在の形態には二つあつて、我々が物理的存在形態と呼ぶ一方のものは質料と形式から成立つ具體的なものであり、數學的存在形態と呼ぶ他方のものは質料と形相の統體をなすものでなく質料から分離せる形式のみのものであると答へやう。このことから、我々の空間は空虛であり無規定であることが理解されるであらう。

しかしアリストテレスは上述の見解を採ることを我々に許し得ないであらう、また假令へ許し得るにしても、それを欲しないであらう。

すなはち、空虛な空間は假令へ存在するにしても何等の働きもしない。ところでアリストテレスは、何等の働きもしないものは絶對に存在するものではないと考へてゐる。從つて彼は、現勢的な働きまたは潜勢的な働きに屬するもの以外には存在の種類を考へてゐず、空虛な空間はこの兩者を缺いてゐるから、空虛な空間は全く存在し得ないと信じてゐる。そのためアリストテレスは、レウキッポスやデモクリトスが、恰も無なるものが何等かの意味で存在し得るかの如く考へて、運動の舞臺として空虛な空間を原子に賦與したことを、論難してゐる。(一) ところでアリストテレスの教説に於ては、存在するといふ言葉と限定されるといふ言葉とは同義であるから、その結果眞に存在するものはすべて、或る性質によつて規定されてゐなければならなかつたのみならず、また有限な大きさにより規定されてゐなければならなかつた。かくて我々は形而上學的原理—それからアリストテレスは出發して所謂空間を否定するに至つた—を知つたのである。すなはちこの原理は内的精神として場所に關するすべての議論を包んでゐるのである。ところで、一聯の自然學的理由—これによりアリストテレスは場所を空間に置換へるに至つた、尤も彼の他の教説はこの理由に制肘されないにしても—にもまたはからずも到達したのである。この自然學的理由を大體次の様に述べやう。

(一) Metaph. I, 985, b, 4「レウキッポスと彼の弟子(ゲイトス)たるデモクリトスは、充實せるものと空虛なるものとが要素であるといひ、一方を存在者他方を非存在者とよぶ、すなはちこれらの中充實せるものと固體とを存在者とよび空虛なるもの稀薄なるものを非存在者とよんでゐる。それ故、存在者は非存在者より以上にすぐれて存存するものではないといふ、なんとなれば空虛は物體よりも劣つた存在ではないからである。」Metaph. III (現行版では IV) 1009, a, 35「そこで、もし非存在者は生じ得ないとすれば、アナクサゴラスやデモクリトスが萬物は萬物の中に混在してゐるといふ様に、事物は兩者(反對せるものまたは矛盾せるもの)として前から存在してゐたのであらう。蓋しデモクリトスは、空虛なるものも充實せるものも、あらゆる部分に同様に存

在するが、しかしそれらの一方は存在者であり他方は非存在者であるといつてゐる。」――Cf. De Gener. et Corr. I, 317, b, 8「實體(οὐσία)でも個物(τόδε)でもないものには、他のいかなる範疇例へば性質(ποιόν)も量(ποσόν)も處(ποῦ)も屬しないことは明かである、さもなければ、屬性は實體から分離して了ふであらうから。」

實際我々は、性質と差別とを全く缺いた無限定な空間を把握してゐるからして靜止にも運動にも同等に適應してゐる物體が或る特定の方向へ移動しやうとすることはないと考へてゐる。それ故、運動は物體の本性と結びついて居らず、物體に對し或る外面的なものとして附加されるのだと我々は考へるのである、すなはち、このことからして、諸種の運動が相互に相違するのは、いはば物理學的性格によるのではなくして、むしろ數學的理由によるのだと思ふのである。從つて我々は我々の無限定な空間を運動の幾何學的概念に結びつけてゐる、すなはち我々は、運動を、圖形と同樣、數學的に研究さるべきものとして、これを幾何學者に讓つてゐるのである。しかしながら、アリストテレスは諸種の運動を幾何學的に區別せずに自然學的に區別し、下降運動の性格と動向は、上昇運動のそれと異ると信じてゐたから、この理由に導かれて我々の無限定な空間を全く排擊し、場所について語ることになつたのである。すなはち、彼は物體の內的本性から生れ出た運動は物體と結びついてゐると考へてゐる、例へば火が上昇するのは特有の形相を完成するのだといふ意味を持ち、自由に運動する水は土と空氣との間にいはば準備されてゐる安息所を見出す時にのみ靜止するのである。――從つて、相互に異る諸性質や種々の靈が、重さを示す運動輕さによつて動く運動の內部にまで滲透してゐると考へてゐる。しかし自然運動が性質によつて相互に異るのだとすれば、自然運動の境界すなはち自然的場所もまた性質によつて區別されるであらう。しかし我々の空間――それの部分は幾何學的差違のみによつて特徵づけられた――は、もはや問題とされないであらう、すなはち、いまや空虛な無規定な空間は、有限な大きさや性質によつて規定された場所に置換へられるであらう。從つて動物の似像たる全世界は一定の秩序を保持

せる・一定の、要素から成立つであらう、この秩序を保有するもの、換言すれば、他のものを包む各の要素を取圍むもの從つてまた一切のものを包む天體は眞實の意味に於て場所と名付けられるであらう。このことからして、アリストテレスの場所は物體に先立つて存在するのでなく、物體から或ひはむしろ物體の秩序と配置とから生れるのであることが結論されやう。76

近代に於て同じ問題に聯關せる見解を見出すであらう。例へばライプニッツはアリストテレスと同樣空間が要素の秩序と配置から生ずると主張した、從つて、ライプニッツが探求さるべき空間に到達したのにアリストテレスがいはば場所の中に停滯してゐたのは何故であるかを問ふことは勞苦に價することである。

ライプニッツはアリストテレスと同樣、空虛な空間が獨立に存在し恰も魚が水中に棲む如く物體が空間の中に存在するとは考へなかつた。空間はものの合成と結合から生れるが物體の部分は物體なるが故に、我々は無限に進まねばならぬか或ひは非物體的要素—これが多數に集れば、恰も目に見えぬ水滴が集つて黑雲となるのと同樣に、延長の混沌とした相を呈する—に到達しなければならぬであらう。從つてライプニッツは、物體間の關係について考へられるのと同じことが部分間の關係にも存することを强調してゐる、すなはち場所が物體の結合から生れるのと同樣、延長は部分の結合から生れるのである。その結果、物體の各の要素は、他から切離して考察されれば、場所のみならず延長をも缺いて居るであらう、そして哲學者は場所のみならずまた特に延長と空間を問題としなければならぬと思はれるであらう。

もしアリストテレスが、物體と物體の部分とを同樣に取扱つてゐたならば、彼もまたライプニッツと異らぬ見解を抱いたことであらう。しかしアリストテレスは、物體そのものは場所を現勢的に有するが、物體の部分は場所を潛勢的に有するに場ぎないと考へたから、近代の哲學者が緊密に結びつける二つのものすなはち場所と延長とを彼は別々に考察し、物體の場所について論じられたことがらは絕對に部分の場所に移さるべきでないと考へて77

るる。しかしながら我々は、場所に關する限り、アリストテレスの現勢態と潜勢態の區別を覆さう、すなはち、我々がもはやアリストテレスを問題とせずライプニッツを問題とするならば、延長と場所との血緣關係は直ちに明かになるであらう。

さて、我々は、物體の内に位置する・物體の・部分を考察しやう。物體全體はそれを包むものの表面を場所として有するのと同樣に、その部分はそれの場所、すなはち物體の内部に於てこの部分を取圍み包みこむ表面、を有するであらう。ところで、これと同じことが部分の部分についても語られ得るから、物體全體は境界の層をなし、その境界の各は他の表面を取圍む表面であるであらう。しかしながら、表面そのものは線に分たれ、線はまた線の部分に分たれ、そしてこれらの一は他の中に包まれてゐるであらう。アリストテレス自身の證言によれば、この分割は無限に進み物體の大きさはいはば解體し包まれるものが更に包まれるといふことになるから、物體的延長が生ずるのは把へ難き部分そのものからではなく部分の結合からであるといふ方が、理に協つてゐる。從つて場所が物體の配置から生ずるのと同樣に、延長は部分の結合から生ずるであらう、我々はライプニッツ—彼は部分は延長を缺くと主張し、延長の・連續的な無限に分割された・觀念は不明瞭であるから、これを個體的非物體的な多數の要素に置換へんとした—と同樣の見解に近附くであらう。

しかしながら、これらのことを許容するならば、アリストテレスの世界の連續は破れ、觸れたり動いたりする能力を缺いた・無數の・非物體的要素が一の動物から生ずるであらう。ライプニッツはこの歸結に全く驚かず、各の要素は獨立なる動物であつて、要素が他の要素と對應するのは、何等かの交通によるのでなく、豫定調和によるのであると考へた。しかしアリストテレスはかゝる調和を考へつかなかつたし、假に考へたにしても有益な伴侶とは思はなかつたであらう。從つて彼は物體の表面に膠着して、物體全體には場所を現勢的に與へたが、部分には潜勢的に與へたに過ぎなかつた。この區別によつ

て、アリストテレスは物體的部分相互間の連續を損はずして保ち、かくて場所論に於て延長が論題にならないと思はれると論じ得たのであつた。從つて場所を延長から切離す限り、この現勢態と潛勢態の區別の中にアリストテレスの敎說の難點が見出されるのである。

要するに、場所は二重の血緣關係、すなはち一方では無限者と他方では延長と血緣關係を有するのであつて、この關係を解明するため近代の哲學者は惡戰苦鬪したのである。しかしアリストテレスは共通の場所と第一の場所を說き、後者によつて場所を延長から區別し、前者によつて場所を無限者から區別した、そして後代の人々を惱ましたこの二重の問題を、彼は解決することなく棄て去つた樣に思はれる。

もしアリストテレスが問題の棄て去られることを自覺してゐなかつたとすれば、彼はこのため確に非難さるべきであらう。しかし彼はデモクリトスの空虛にして無限なる空間の敎說を知らないことはなかつた、そしてプラトンが始めて場所について論じたから特にプラトンを賞讃するため空虛にして無限なる空間に言及したのであつた。[(1)] 從つて我々の自由な解放された空間から生ずる困難を豫知してゐた、しかも打ち克ち難き困難であると考へてゐた、すなはち形式と質料を區別するのは—認識されたものについてではなく認識そのものに關する限りに於ては—近代のこと或ひは漸く前時代のものになつたばかしのことであることを認めるならば、上述の點でアリストテレスは殆んど誤つてゐなかつたと思はれるであらう。それ故、レウキッポスやデモクリトスにより時至らざるに物體から解放された空間を、アリストテレスは場所に置換へやうとした、すなはち運動の無限な舞臺を、有限なるものを有限なるものの中に包むことに、置換へやうとしたのであつた。この操作によつて、彼は空間を物體の中に埋めたのみに止らず、また問題そのものをも、かくいふを許されるならば、埋めて終つたのである。

(1) Phys. IV, 209, b, 16「蓋しすべての人々は場所が或るものであると語つてゐるのに、彼〔プラトン〕のみはそれが何であるかを述べることを試みた。」

【了】